

いまの日本は、少子高齢化で将来への明るい見通しも立たない上に、近隣大国の脅威にもさらされ、まさに内憂外患、国家の大難事に直面しています。実はこの状況は、いまから百五十年前の幕末の様相と瓜二つです。そして注目すべきことは、当時の日本が山積する難題を極めて短い間に克服し、東洋の奇跡と謳われる近代化を見事に成し遂げたことです。私は、この

幕末史にこそ現代日本が指針とすべきものがあると考え、研究を重ねていく中で浮かび上がったのが、横井小楠と佐久間象山でした。当時、お隣の大国・清は、アヘン戦争に敗れイギリスに蹂躪されてきました。すぐそこまで押し寄せてきた西洋近代文明の脅威に、日本中が凍りつきました。これを力で打ち払おうとする攘夷論が沸騰し、国粋主義的な気運が高まっていく中、横井小楠と佐久間象山は、全く違う視点で日本の危機を捉えていました。

二人は、この難局は東洋思想に対する西洋近代思想の挑戦と捉え、東洋思想によって西洋思想を羽包んでいくことこそ肝要と説きます。東洋思想は、西洋思想のように力で相手を屈服させる覇権主義的な性質のものではない。仁義、道徳に代表される人間性をもって国を統治していく東洋思想こそが、この国難を乗り越える真の力になると説きました。そして横井小楠は、儒教の教えを時局に応じて柔軟に生かしていく必要があるとして、『書経』の深い読みを説きました。『書経』とは、東洋思想の根幹をなすテキスト、

横井小楠は一八〇九(文化六)年、肥後国熊本城下の内坪井町に、熊本藩士である横井時直の次男として生まれ、江戸時代の次、三男というのは、文武でよほど秀でた力がない限り、兄の庇護の下、厄介者とか部屋住みと呼ばれ、一生細々と生きるほか道がありませんでした。しかし小楠は子供の頃から、悲惨な運命をそのまま受け入れるしかないのであれば、政治がなれないと同じ。自らの悲惨な運命を覆そうと決意し、十歳で藩校の時習館へ入学して勉強を始めました。十三歳の時には親友の下津休也と、二人で力を合わせて理想国家をつくらうと語り合っていたようですが、努力の甲斐あってメキメキ頭角を現し、塾生の最高位である居察長となって江戸遊学を許されました。

私は二十年にわたり、東洋思想をベースとする経営指導に携わってまいりました。そんな私のもとへこの頃、西洋の学問を修めた方がしばしば訪ねてこられるようになり、文明の大転換によって西洋近代思想が行き詰まってしまい、何かこれに替わる新しい指針を得たいというのです。大学やメーカーの研究所からも、発想の転換をしてこの行き詰まりを打開したい、と頻繁にご相談をいただいています。少し前までは、東洋思想をやっているというのと、変わり者と思われることを考えると、隔世の感があります。

現代社会で取り沙汰されるのは専ら技術のことばかりです。この国家の大難事に私たちが大切にすべきことは何なのか、偉大な先人たちの足跡を辿りながら考察してみたいと思います。

四書五経の一つであり、ここでは同書を古代の理想国家である堯・舜・禹、更に夏・殷・周三代の治の象徴として挙げています。三代の治とは、土道に基づく富国強兵であり、東洋思想に基づく近代化を図っていくためには、この三代の王道の政治をいまの世に復活させるべきだと主張したのです。一方の佐久間象山は、東洋の道徳と西洋の芸術(技術)、つまり東洋と西洋の半球が一体になってグローバルという球体が形成され、初めて世界は安泰になると説きました。まず道徳という国是が確固としてあった上で軍備などの近代化を進めていくべきことを主張したのでした。

ところが酒癖の悪かった小楠は、宴席で雄藩の藩士と議論し、徹底的に打ち負かしてしまったことで恨みを買ひ、トラブルを恐れた江戸の留守居役によって無理やり処罰の対象とされて帰国させられました。明るい未来が閉ざされた上に、経歴に傷がついた小楠。さぞかし落胆しているかと思いきや、彼はこの天は我が物だと言わんばかりの気宇で暮らしていたのです。小楠は訪ねてきた知人に次のよう

横井小楠と佐久間象山に学ぶもの

強大な西洋近代文明の脅威に直面した幕末日本。未曾有の国難に誰もが浮き足立つ中、驚くべき先見の明を発揮し、国の進むべき道を指し示したのが、横井小楠と佐久間象山である。内憂外患の現代日本が、二人の高い志から学ぶべきものを探った。



横井小楠

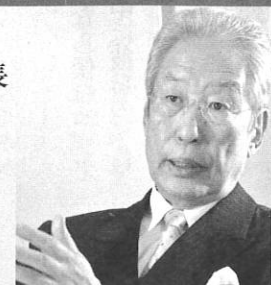
よこい・しょうなん——文化6(1809)年熊本生まれ。儒学者・政治思想家。安政5(1858)年福井藩に招かれて政治顧問になる。万延元(1860)年『国是三論』を著す。文久2(1862)年幕府政事総裁職となった松平慶永(春嶽)のブレーンとして活躍。翌年帰藩するが、江戸での刺客事件による「土道忘却」の罪名で失脚。維新政権下で参与に起用されたが、明治2(1869)年京都で暗殺された。



佐久間象山

さくま・いしざぶろ——文化8(1811)年長野生まれ。儒学者・兵学家。天保13(1842)年老中兼海防掛となった信濃松代藩主の真田幸貫から命を受けて海外情勢の研究を始め、「海防八策」を著す。嘉永4(1851)年勝海舟、吉田松陰、坂本龍馬などが後に入門する私塾を江戸に開き、砲術・兵学を教える。嘉永7(1854)年門下の吉田松陰が起した事件に連座して、松代藩での塾居となる。元治元(1864)年には一橋慶喜に招かれて上洛。公武合体論、開国論を論じるも、同年皇尊攘夷派に暗殺された。

東洋思想研究家・イメージプラン社長
田口佳史



たぐち・よしふみ——昭和17年東京生まれ。日本大学芸術学部卒業後、日本映画社入社。47年イメージプランを創業。著書に『貞観政要講義』(光文社)『超訳孫子の兵法』(三笠書房)『リーダーに大切な「自分の軸」をつくる』(かんき出版)『清く美しい流れ』(PHP研究所)など多数。

に言っています。

「かつて朱子の書をよみ、その旨を会するあるがごとし。致知もとより軽からず。重んずるところは実履にあり。静裡に閒氣をやしなひ、動処に天理を察す。須臾も道をはなれず。二二にいたれば、これ達士」

(かつては朱子の書を読み、その主旨とするところを会得した。そこで思うは、朱子の説く致知こそ軽んじてはいけない。重視するのはその実践だ。静に広い心を養い、動に天理を推察する。少しの間も道を離れることはない。そうした人格に至る達士を目指そう)

「われは愛す陶靖節、貧賤も憂ふるところにあらず。窮居して書巻にたいすれば、襟懐はおのづから悠々たり。あしたに仁義に生くれめん。この人まことに千古、清氣斗牛をつく」

(私が親愛する陶淵明は、貧しく下層の暮らしにも何の憂うところもない。ひとたび自室で古典を開き対すれば、心のうちは自然と悠々たるものになる。朝に仁義の真髓を実践できれば、夕刻に死んだとしても何の不足があるうか。陶淵

明こそまことの永遠の達士、その清らかな気は天の星にも達するほどだ)

時に小楠三十二歳。人間というのは、苦衷の時にこそ本質が出るものですが、この小楠の意気軒昂な様子はどうでしょう。まさに青雲の志を体現する心意気が窺えるところです。

富国、強兵、士道に基づく近代化

このように小楠は、故郷である熊本藩ではその天分を十分に発揮することができませんでした。彼の発する光があまりにも強過ぎて近くに居る者は正視できず、その価値も十分理解できなかったものと思われまふ。

しかし三十三歳になると、家老の家系に連なる長岡監物、親友の下津休也、荻昌国、元田永孚らと後の実学党をつくり、形骸化した朱子学から脱し、真の修己治人を求めての研究を始め、三十五歳で私塾を立ち上げます。さらに四十三歳の時には北九州、山陽、畿内、東海道を巡歴して各地の碩学との交流を図りました。通信手段が未発達であった当時

は、直接対面するしか意見交換の手段はありませんでした。本当の意味での人間力、人格の勝負になるわけですが、小楠の力量は多くの人を感服させ、熊本に横井ありという噂は一気に広まったのでした。

小楠の評判を聞きつけて訪ねてきた人の中には長州の吉田松陰、福井藩の三寺三作もいました。そして三寺の推挙で福井藩に赴いた小楠は、そこで水を得た魚のような活躍を遂げたのでした。

小楠の福井藩における業績としてまず挙げられるのが「国是三論」です。小楠はここで貿易による富国、海軍の確立による強兵、古代の理想国家である堯・舜・禹の治世に学ぶ士道の重要性を説きました。その中で六府、三事、三事、三事が行き渡っている社会であることが大切であると主張し、その出典である『書経』の深掘りをするのです。六府とは水・火(エネルギー)・金(財)・木(木材)・土(インフラ)・穀(穀物)、三事とは正徳(正しい徳)、利用(無駄なくよく用いること)、厚生(人に厚く、命を尊ぶこと)を表しています。つまり物資を豊かにし、自己の最善を

もって他者に尽くしきる精神風土がしっかり備わってこそ国も繁栄していくと説いているのです。

小楠は、これを単なる理論理屈に止めておくことなく、越前物産総会所という藩内物産の専売所を開いて相当な実績を挙げ、さらに長崎に越前屋という交易会社をつくって生糸の輸出で藩に莫大な利益をもたらしてみせたのです。

その後、藩主・松平春嶽が幕政改革に携わることになり、意見を求められて小楠が説いたのが「国是七条」でした。小楠はそこで、参勤交代の中止と大名妻子の帰国、外様・譜代を問わず有能な人物を登用し、意見の交流を自由にする、ことや、海軍を興して兵力を強くすること、政治直轄の貿易の推進などを献策しましたが、この「国是七条」は、後の「五箇条の御誓文」や坂本龍馬の「船中八策」など、様々な政策に影響を及ぼしています。

これほどの実績を挙げたにもかかわらず、福井には小楠を顕彰するものは豊富に残っていません。小楠は熊本の人であり、他国の人間の実績を持つてはやはり福井の名折れになると考えたのでしょうか。故郷の熊本でも功績を讃える

ものは多くありません。未曾有の大転換期に直面するいまこそ、小楠の説いた西洋文明を包括するほどの理想主義的儒教の精神に立ち返る必要性を、私は強く実感しています。

そうした小楠の志の高さが窺えるのが、アメリカへ留学する二人の甥に贈った「送別の語」です。

「堯舜孔子の道を明らかにし西洋器械の術を盡くす

何ぞ富国に止まらん

何ぞ強兵に止まらん

大義を四海に布かんのみに心逆らふこと有るも人を尤むること勿れ

人を尤むれば徳を損ず

為さんと欲する所有るも心に正にする勿れ

心に正にすれば事を破る

君子の道は身を脩むるに在り」(堯と舜、孔子の説いた徳と礼による人と国の在り方をしっかり身につけた上で、西洋の近代技術を活かし切る。目標とするところは、富国や強兵に止まってはいけない。大いなる道義を世界に広めることだ。自分の嫌なことがあっても人を批難してはいけない。そうすることは己の徳を減らすことになる。

何かをしたいと思った時は、一時の熱でやってはいけない。やがて熱が冷めたら成就できない。目指すべき人間の在り方は、自分の身を修めて、立派な人間になることなのだ)

揺るぎない自己から生まれた先見の明

佐久間象山は一八一(文化八)年、信濃松代藩士・佐久間一学國善の長男として生まれました。

象山といえは、ずば抜けた才能を持つ一方、傲岸不遜、容貌魁偉で、下手をすれば人に嫌われ、埋もれたまま一生を終えていたかもしれない人物でした。そんな象山が世に出ることができたのは、偏に彼の資質を見抜き、取り立ててくれた時の藩主・真田幸貫のおかげと言えます。

誤解を受けやすい象山の実像をご理解いただくために、ぜひご紹介したいのが、彼の少年時代のエピソードです。

象山の父親・一学は藩の右筆で、位は低かったものの、藩内に自身

の道場も構える剣の達人でした。ある時、道場を訪ねた藩主・幸貫に太刀筋のよさを認められ、褒美を遣わされることになった象山は、母親のことを願ひ出ました。象山の母は身分の低い足軽の家の出であったため、当時の武家の慣例で息子であっても大切な母を呼び捨てにしなければならず、そのことをいつも心苦しく思っていた象山は、幸貫に藩主の力で何とかしてほしいと願ひ出たのでした。

それを受けた幸貫は、翌日象山の母を城に呼び出しました。つまり、士分以上でなければ叶わぬお目通りが叶ったことにより、母親は晴れて士分以上のお墨つきを得たわけでした。

象山の人間性が窺える心温まるエピソードです。

その後象山は、弟子入りしていた鎌原桐山を通じて、昌平黌の儒官にして儒学の大成者・佐藤一斎の門を叩き、山田方谷とともに頭角を現しました。ちなみに象山の弟子には吉田寅次郎(松陰)と米百俵で有名な小林虎三郎が二虎として名を連ねています。

ントは技術に着目したことで、それは三十二歳の時に著した「海防八策」によく現れています。そこでは、これまでの幕府の禁令を改めて堅固な大船をつくること、各地の要衝に砲台を設置するため、その資材となる銅が交易で流出することを防ぐべきこと、さらに教育機関を設けて優秀な人材を育成すべきことを説き、教育こそが防衛の根本であることを喝破しています。

ペリーの黒船が来航して日本中大騒ぎになったのは一八五三年ですが、象山はその十一年も前の一八四二年にこの「海防八策」を著しており、その先見の明がいかにずば抜けたものであったかが理解できます。

また、象山も小楠同様、ただ机上の論理を掲げるだけでなく、行動の人でもありました。

「海防八策」を著した年、象山は江川太郎左衛門、高島秋帆に弟子入りして洋式の兵学を学びます。そこでオランダ語の必要性を実感した象山は、長崎に生まれ育った黒川良安のもとでたちまちオランダ語を習得し、そこから得た西洋の知識をもとに、大砲の製造及び

砲術指南を行った他、日本初の指示電信機による電信、ガラス製造、地震予知器の開発等を行いました。象山の論理性がよく表れているのが、黒船来航時の反応です。大半の人が黒船の姿に恐れおののく中、象山は冷静に大砲の射程距離に着目します。江戸湾に入ってきた黒船が、威嚇のために沖へ大砲を撃つてみせるのを見て、幕府の役人はその江戸城にも届く射程の長さに驚き、戦々恐々とします。しかし象山は冷静にその射程距離に負けない大砲をつくるのが自分の役割と考え、それを実際につくってしまうのです。

象山の卓越した眼力は、日々の学問の蓄積によって人間として揺るぎない軸が確立していたところからくるものだとは考えます。象山ほど武士道をしっかり弁えた人物はおらず、その優れた精神の基盤は、階段を一段一段丁寧に上るように築き上げられたものなのです。

小楠と象山がもつと生きていた

日本の近代化と、維新後の国家構想を担うことを期待された小楠

と象山ですが、二人とも天命を全うすることなく志半ばで非業の死を遂げてしまいました。小楠は禁じられていたキリスト教の布教に関わっていると疑われ、象山は天皇を蔑ろにする不敬罪との言い掛かりをつけられ、いずれも暗殺されてしまうのです。二人の発想があまりにも時代に先んじていたがゆえの悲劇でした。

勝海舟は「おれは、今までに天下で恐ろしいものを二人見た。それは、横井小楠と西郷南洲（隆盛）とだ」とその名を挙げ、「その思想の高調子なことは、おれなどは、とてもはしごを掛けても、及ばぬと思ったことがしばしばあったヨ」「もし横井の言を用ゆる人が世の中にあつたら、それこそ由々しき大事だと思ったのサ」と高く評価しています。

また、勝は当初、妹の婿であった佐久間象山について、あんな鼻持ちならないやつはいないなどとも言っていました。象山が亡くなった時の惜別の詩に「象山先生」と特別な敬意を払っており、象山をいかに高く評価していたかが窺えます。勝海舟ほどの一流人が絶賛する小楠と象山は、世界レベル

の人材であったといっても過言ではないでしょう。

私は、もし小楠と象山が明治十年頃まで生きたとすれば、明治政府の様相は全く違ったものになったろうと思います。総理大臣に西郷南洲を据え、横井小楠と佐久間象山に理想国家建設の構想係として存分に力を発揮してもらい、その実現のための実務係として大久保利通と伊藤博文に両脇を固めてもらえば、これ以上ない最強の布陣になったと考えます。あいにく日本は、二人の世界レベルのブレインを失ったばかりに、尊い和魂を失い、極端な言い方をすれば西洋の物真似、洋魂洋才の近代化を進めるしかなかったのです。小楠と象山を失ったことは、日本にとって途轍もない国家的大損失でした。

しかし、二人の蒔いた種は後世に様々な花を開かせました。日本の近代化に不可欠な法体系を整備した井上毅、加藤弘之、西村茂樹、津田真道らが、ことごとく小楠と象山の弟子であったこと一つをとっても、小楠と象山の影響の大きさが窺えるのです。二人が類い稀なる先見の明を発

揮できたのは、学問をとおして物の根源、根本を深く追究したからといえます。ともに儒学の根本を徹底的に深掘りしたことで深い思考が養われ、それが先見の明に通じたものと私は考えます。二人の足跡を辿っていると、私の脳裏にはかの釈月性の漢詩が浮かび上がってきます。

「男児志を立てて郷関を出ず 学若し成る無くんば死すとも還らず 骨を埋むる豈に惟だ墳墓の地のみならんや 人間到處青山有り」

(男子が志を立てて故郷を出たからには、志を成就しない限り郷里には帰るつもりはない。私の骨を埋めるのは、郷里の墓とは限らない。人の世にはどこへ行っても骨を埋める墓所つまり、いのちの限り戦う場所があるではないか)

青い空に浮かぶ雲を突き抜けるような高い志に生きた小楠と象山。道半ばにして倒れた二人の偉大な先人の志を継いで、我が国が直面する大難事に果敢に立ち向かっていく気概溢れる人物が輩出されることを、私は願ってやみません。

リーダーのための古典活学講座

『論語』は人生を高め、

『老子』は人生の裾野を広め、深める。

混迷の世といわれるいまこそリーダーは『老子』に学び、万物の根源といわれる「道(タオ)」に沿って、人生も経営も生成発展させたいものである。

『老子』に学ぶ人間学

開講の言葉

『老子』の説く生き方 無器用でいいんだ

しっかりと生きるには、多くの束縛と重圧に耐えることじゃあない。時には自分の心を自由に遊ばせ、解放して新鮮な空気を吸いながら、しなやかに生きることなんだ。そうした生き方の基本を、説いているのが『老子』だ。是非一回その妙味を味わってみよう。



【講師】 田口佳史先生 (東洋思想研究家)

【第1講】 2月17日(金)

●『老子』入門

故郷の“胆っ玉母さん”「道」

【第2講】 3月9日(木)

●『老子』的生き方とは何か

自分の人生を生きる

【第3講】 4月13日(木)

●柔弱は剛強に勝る

ほんとうの強さとは何か

【第4講】 5月19日(金)

●『老子』が教える人生訓

生きてるだけで百点!

【第5講】 6月8日(木)

●「道」とともに生きる

『老子』からのメッセージ

【期 間】 平成29年2月~6月(全5講)
【時 間】 13時00分~16時00分
【会 場】 京王プラザホテル(新宿)
【定 員】 50名
【受講料】 18万円(税別)

申込要項

【参加申し込み方法】

- TEL 03-3796-2115 (直通)
- FAX 03-3796-2108
- HP <http://www.chichi.co.jp>
[致知 検索] (カード決済可)
- Eメール seminar@chichi.co.jp
- 郵送 〒150-0001
東京都渋谷区神宮前 4-24-9
株式会社 致知出版社
セミナー部

【受講料お支払い方法】

お申込み受領後、ご請求書をお送りいたしますので、期日までにお振り込みください。
※ご入金をもちまして お申込み完了とさせていただきます。